

氏名	稲垣 朱美
学位の種類	博士(看護学)
学位記番号	第56号
学位授与年月日	令和8年3月19日
学位授与の条件	学位規程第3条第3項該当
学位論文	婦人科がんと診断され治療を受けた性成熟期女性の自己概念の変容の様相－診断後3年までの性の変化に焦点を当てて－
論文審査委員	主査 菅原 よしえ 副査 花里 陽子、萩原 潤、後藤 篤、名古屋 祐子

## 論文の要旨

### 研究目的：

本研究の目的は、婦人科がんと診断され治療を受けた性成熟期女性の、診断後3年間における性の変化を通じた自己概念の変容の様相を明らかにすることである。

### 研究方法：

ライフストーリー研究を用いてデータ収集と分析を行った。研究参加者1人あたり3～4回、1回あたり80分程度のアクティブ・インタビュー法にてデータを取集した。得られたデータをテーマ分析にてコード化し、各ケースのエピソードを時間経過に沿って並べてライフストーリーを構成した。その後、各ライフストーリーから婦人科がんの診断・治療に伴う性の変化を通じた自己概念の変容に関するエピソードを抽出して社会構成主義的視点から解釈し、テーマと大テーマを生成した。

### 倫理的配慮：

本研究は、「宮城大学研究倫理審査規程」および「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づき、宮城大学研究倫理専門委員会の承認を得て実施された（承認番号：令和6年度宮城大第85号）。

### 結果：

研究参加者は、性成熟期に婦人科がんと診断され治療を受けた女性4名であり、全員が手術を受け、子宮や卵巣を含む付属器を摘出していた。婦人科がんの診断・治療に伴う性の変化を通じた自己概念の様相として、4つのテーマ<結婚して子供を持つ人生を歩むことを「普通」とする価値観が、妊孕性の喪失によって意識化され、自己との対峙を余儀なくされる><性の変化によってパートナーとの関係性に葛藤しながら、自己のあり方に思い悩む><社会に存在するジェンダーイメージに女性性のシンボルを喪失した自己を投影し、女性としての自己が意識化される><婦人科がんの診断によって「生」が二重に失われること直面し、未来を描けず葛藤する>が生成され、そこから、1つの大テーマ【婦人科がんの診断・治療を通じて「性」と「生」の問題に対峙し、内在化されていた内的準拠枠が意識化されることで自己のあり方を問い直す】が抽出された。女性たちは、婦人科がんの診断後3年が経過しても、診断・治療に伴う性の変化によって自己のあり方を問い直し続けていたことが示された。

### 考察：

性成熟期にある女性が、婦人科がんと診断され治療を受けることで直面する自己のあ

様式第5号

り方には、他者との関わりが影響し、研究参加者個々で異なることが推察された。社会に存在する女性の生き方に対するさまざまな言説にさらされる中で、新たな自己のあり方を見出すことは容易なことではなく、苦悩を抱えながら現実と向き合う直向きな女性たちの様相が浮き彫りになった。

婦人科がんの診断・治療によって生じる性に関する問題は、女性個々の価値観や社会的文化的規範に影響されることが考えられる。看護師は、女性たちが抱える苦悩の背後に潜む社会文化規範の存在について共に考え、女性自ら自身の価値観を客観視し、新たな自己を構築することができるよう長期的な視点での支援が求められていると考える。

**キーワード：**婦人科がん、性成熟期女性、性の変化、自己概念の変容、社会構成主義

## 審査結果の要旨

本研究論文の審査は、提出論文及び研究に関する対面審査（令和8年1月13日）で行った。研究主題は、婦人科がんと診断され治療を受けることで変化する性について、日本人女性における性の変化と自己概念の変容に関する研究であった。国際的な研究結果をふまえて、ライフストーリー法を用いて、社会構成主義の立場で行った研究で、独自性、新規性が認められた。研究課題に応じた方法を選択し、日本人女性の生涯健康に対する社会の影響が検討され、発展性が認められた。論文構成は、序論に研究背景と研究動機が明示され、文献検討では、婦人科がんの動向と治療、性成熟期女性の特徴、性を構成する要素を定義した後に、婦人科がんと診断され治療を受けた女性の性に関する研究、自己概念に関する研究等について論述されており、本研究の位置づけが明確であった。文献検討に続く、その後の論文構成も、本研究の目的、方法、結果、考察、結論と、適切であった。論理構成は、対面審査にて、社会構成主義の立場での研究者の思考を客観的に研究方法、考察に明示する必要性が指摘された。本研究論文の一貫性を保ち、本研究の独自性がより明確になることから加筆、修正が求められた。

修正された最終論文では、研究者の社会構成主義の立場での論述が加筆された。また、研究発表会では、研究者の社会構成主義の立場をふまえた質疑応答がおこなわれた。女性の生涯健康に関わる性についての研究は、繊細で扱いにくい課題であるが、本研究論文では、国際的な知見、日本の文化における歴史的背景をふまえて、性と生、自己について、より深く探究されていた。

以上のことから、審査委員会は、博士（看護学）の学位を授与するにふさわしいものであることを認めた。